宗教改革記念礼拝説教（2026 年 10 月 25 日）

説教者：中村信哉

福音とは何か

ローマ人への手紙 1 章 16-17 節

はじめに

今週の土曜日 10 月 31 日は、「宗教改革記念日」です。そのため、その直前の日曜日である今日は、「宗教改革記念礼拝」としました。今日の聖書箇所であるローマ人への手紙 1 章 16-17 節は、「宗教改革」において大切な御言葉です。というのは、宗教改革者マルティン・ルターは、この御言葉の真理を発見したことによって、宗教改革への道を歩み始めたからです。つまりそれは、私たちプロテスタント教会にとって、この御言葉には非常に大切な真理が込められているということでもあります。またこの御言葉は、ローマ人への手紙全体の主題であるとも言われます。つまり、ローマ人への手紙をもし一言で言い表すとすれば、この 1 章 16-17 節にまとめられるということです。ローマ人への手紙全体は、この 1 章 16-17 節を詳しく解説するものであるとも言えます。

1. 福音を恥としない

パウロは、16 節で**「私は福音を恥としません」**と言います。パウロがこの言葉を語ったのは、15 節にあるように、**「ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたい」**と思ったからです。当時のローマは、世界の中心的な都市でした。当時の世界は、ローマ帝国によって支配されていました。当時の世界の権力、富、文化が集中している大都市でした。その世界の中心地で、パウロは福音を伝えたいと思っているのです。そして、そこで福音を伝える時、「私は福音を恥としません」と言っているのです。

私たちは福音を「誇り」としているでしょうか。それとも「恥」としているでしょうか。私たちは、先進国の日本という国に暮らし、祖先崇拝や神道または仏教が人々の心に根づいた国で、クリスチャンとして生きています。日本人の 99%以上が、クリスチャンではありません。学校や職場では、クリスチャンはほとんどいません。家庭の中でも、自分だけがクリスチャンであるということも少なくありません。そのような中で私たちが、福音を「恥」とせずに、「誇り」として生きるということは、決して簡単なことではありません。

2. 福音は神の力である

ではパウロは、なぜ福音を「恥」としないと言い切ることができたのでしょうか。それは、16 節にあるように、**「福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力」**であるという確信があったからです。パウロは、「福音には力がある」と

いう確信があったのです。パウロは、これと似たような言葉を、Ⅰコリント１：18でこう語っています。**「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です」**。ここでパウロは、福音を「十字架のことば」と言い換えています。つまり、「福音」とは、「十字架のことば」なのです。「十字架で死なれたナザレのイエスこそ真の神である、そのイエスの十字架の死は、私たちの罪を償うための身代わりの死である」。これこそ、「福音」であり、「十字架のことば」です。この「十字架のことば」は、多くの人にとっては、「愚か」に聞こえるのです。ですから、私たちは「福音」を「恥」としてしまう気持ちに駆られるのです。しかし、ここでもパウロは、「十字架のことば」つまり「福音」は「神の力」であると言うのです。

　では、福音には、どんな力があるのでしょうか。パウロは、福音には、「ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす」力があると言うのです。福音は、「救いをもたらす力」があるのです。人を救う力があるのです。では、私たち人間は、何から救われなければならないのでしょうか。１：18には、こうあります。**「というのは、不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されている」**。私たち人間の不敬虔と不義に対して、神様の怒りが天から啓示されているというのです。５：９にも、こうあります。**「今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです」**。私たち人間が救われなければならないのは、「神様の怒り」からです。神様は、神様に従わない私たち人間に対して、怒っておられるのです。その「神様の怒り」から、私たち人間を救うのが、福音だとパウロは言うのです。

　福音は、イエス様を信じるすべての人を、「神様の怒り」から救う力があります。ここには、「すべての人」とあります。ユダヤ人もギリシア人も関係ありません。日本人も韓国人も、アメリカ人もブラジル人も関係ありません。過去にどんなに大きな罪を犯した人も、これまでどんなに聖人君子として生きてきた人も関係ありません。子どもであろうが高齢者であろうが関係ありません。健常者であろうが障がい者であろうが関係ありません。イエス様を信じる「すべての人」が、「神様の怒り」から救われるのです。それは、イエス様を信じる私たちの信仰に力があるからではありません。そうではなく、福音に力があるから、私たちは救われるのです。イエス様を信じる人に、神様の力が働くからこそ、私たちは救われるのです。私たちの信仰が、私たちを救うのではありません。神様の力が私たちを救うのです。

3.　<u>福音には神の義が啓示されている</u>

　パウロは17節で、「福音には神の義が啓示されている」と言います。福音とは、もともと「良い知らせ」という意味があります。その「良い知らせ」である福音には、「神の義」が啓示されているというのです。実は、宗教改革者のマルティン・ルターは、この「神の義」という言葉に悩まされたのです。福音の中に現わされた「神の義」とは何か、

このことの意味を問い続けたのです。彼は、ここでの「神の義」は、「神様の正しさ」だと理解しました。ですから、福音の中に現わされた「神の義」とは、「神様の正しさ」のことであって、救われるためには、「自分の正しさ」が「神様の正しさ」に到達しなければならないと考えたのです。彼は、修道院に入り、厳しい戒律と祈りと奉仕の生活を送りました。そして「自分の正しさ」が「神様の正しさ」に到達できるように、人一倍熱心に修道生活を送りました。しかし、どんなに熱心に修道生活を送っても、一向に自分が救われるという確信と平安を持つことができませんでした。そればかりか、熱心に修道生活を送れば送るほど、「自分の正しさ」が「神様の正しさ」から遠のいていくことを感じたのです。そして、自分には「神様の怒り」が下るという恐怖と不安に支配されるようになるのです。これが、当時のローマ・カトリック教会の修道士の福音に対する理解であったのです。

しかし彼は、ローマ人のへの手紙を自分で読み進めていく中で、福音の中に現わされた「神の義」というのは、「神様の正しさ」のことではなく、「神様によって与えられる義」であるということに気づくのです。ローマ３：21 には、こうあります。**「しかし今は、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です」**。ルターは、パウロが語っている福音の中に現わされた「神の義」というのは、イエス様を信じる人に神様から無償で与えられる「義」のことであることに気づくのです。彼は今まで、自分の行いや正しい生き方で、「神の義」を得ようと必死に生きてきました。しかし、そうではなくて、「神の義」というのは、イエス様が十字架と復活によって獲得してくださった「義」を、信じるすべての人に無償で与えてくださる、神様の恵みに満ちた「義」であることが分かったのです。「神の義」というのは、私たち人間がどんなに良い行いをしても、どんなに正しい生き方をしても、得られるようなものではありません。「私たちの正しさ」は、どんなに努力しても「神様の正しさ」には、到達できないのです。イザヤ 64：６には、こうあります。**「私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです」**。私たち人間の正しさは、どんなに良いものであっても、神様の前では「不潔な衣」のようなのです。「神の義」は、神の子であるイエス様によってしか獲得できないものです。神の子であるイエス様は、生涯の始めから終わりまで、徹頭徹尾、神様に従順に従われました。そして、私たち人間の罪のための償いの死である十字架の死にまでも従われました。そのイエス様の償いと服従が、神様によって受け入られて、イエス様は「神の義」を獲得されたのです。そしてそのイエス様の償いと服従が、神様によって受け入れられ、「神の義」を獲得されたことの証拠として、神様はイエス様を死からよみがえらせたのです。福音の中に現わされた「神の義」とは、イエス様が十字架と復活によって獲得された「義」を、イエス様を信じるすべての人に無償で与えられるというものです。そうして、「神の義」を与えられた人は、罪があるままで神様の前に「正しい人」として受け入れられ、すべての罪が赦され、「神様の怒り」から救われるのです。これが、パウロが語る

「福音」であり、私たちすべての人にとっての「良い知らせ」なのです。

4. <u>信仰に始まり、信仰に進み、信仰によって生きる</u>

パウロは 17 節で、**「信仰に始まり、信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」**と言っています。ここでの「信仰に始まり、信仰に進ませる」という言葉は、ギリシア語の原文では「信仰から信仰へ」という言葉です。イエス様を信じることによって、「神様の義」を与えられた「義人」は、信仰によって生きていくのです。これは、徹頭徹尾、始めから終わりまで、「信仰」によって生きていくということです。クリスチャンは、最初は、「信仰」によって始まるけれど、その後は「行い」によって生きていくというのではないのです。逆に、最初は「良い行い」に励んでいれば、次第に「信仰」が芽生えていくというのでもないのです。イエス様を信じるクリスチャンは、最初から最後まで「信仰」に生きていくのです。

しかしある人は、思うかもしれません。クリスチャンには「行い」も大切ではないか。礼拝を守ること、聖書を読むこと、祈ること、奉仕をすること、伝道すること、聖書の教えに従うことも大切ではないか、聖書にも「行いのない信仰は死んでいる」とあるではないかと。確かにそうです。クリスチャンとして生きていくには、「行い」も必要です。神様は確かに、御自身に従うことを求めておられます。しかし、パウロがここで言っているのは、「義人は信仰によって生きる」ということであって、「神の義」の前に人はどう生きるかということなのです。つまり、「神の義」の前に、人は信仰以外に意味を持たないということなのです。神様に受け入れられる「義」というのは、イエス様の償いと服従以外にはないのです。私たちの「行い」は、「神の義」の前には、全く無力なのです。何の役にも立たないのです。私たちは、信仰以外に「神の義」を獲得する道はないのです。信仰以外に、神様に赦され、受け入れられる道はないのです。それは、クリスチャンになってからもそうなのです。「神の義」の前には、信仰以外は役に立たないのです。私たち人間には、イエス様が獲得された「義」に依り頼み、それを素直に受け入れることしかできないのです。「信仰」というのは、決して難しいものではありません。福音を通して、神様はご自身の「義」を無償で差し出してくださっているのです。イエス様が十字架と復活を通して獲得された「義」を無償で差し出してくださっているのです。つまり、私たちに対するプレゼントとして差し出してくださっているのです。「信仰」とは、それをただ素直に受け入れることです。感謝して受け取ることです。もっと消極的にいえば、神様から与えられる「義」という無償のプレゼントを、拒まないことです。それが「信仰」というものです。神様から無償のプレゼントを、拒まず素直に受け入れる、それが「信仰」というものです。それは、誰にでもできることです。子どもでも高齢者でも、健常者でも障がい者でも、日本人でも外国人でも世界中のすべての人ができることです。

すべての人に、神様からの「義」という無償のプレゼントが差し出されている、それが、パウロが語る「福音」であり、すべての人にとっての「良い知らせ」なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、クリスチャンのほとんどいない日本という国で暮らしています。学校にも職場にも、ある人にとっては家庭にもクリスチャンがいないという環境の中で暮らしています。その中で、福音を「恥」とする感覚を時に覚えます。しかし、どうか福音には、力があるということを覚えさせてください。福音には、あの宗教改革者ルターの人生を変え、ヨーロッパを中心とする世界史に圧倒的な影響を与える力さえもあることを覚えさせてください。そして、福音には、神様から無償で与えられる「神の義」が現わされていることを覚えさせてください。世界中のすべての人が、この神様からの「良い知らせ」を決して拒むことがありませんように。すべての人が、これを素直に受け入れ、信仰によって生きることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。